

かたりべ70

豊島区立郷土資料館だより



『豊島氏編年史料Ⅰ』作成時の調査風景
(1990年7月28日埼玉県入間郡越生町にて)



ついに完結した「中世豊島氏関係史料集」全4冊

「中世豊島氏関係史料集」堂々完結

お待たせしました！ このたび『中世豊島氏関係資料集(4) 豊島氏編年史料Ⅲ』を刊行いたしました。

郷土資料館では、一九八六年以来、中世豊島氏に関する調査を継続して実施してまいりました。調査地域は日本全国にわたり、その成果として、調査報告書『中世豊島氏関係資料集』の刊行をはじめ、歴史講座や企画展など、様々な事業を行いました。

調査報告書としては、一九八八年の『豊島・宮城文書』の刊行を皮切りに、九二年には、平安時代から室町時代までの史料を収めた『豊島氏編年史料Ⅰ』を、九五年には、戦国期から織豊期までの史料を収めた『豊島氏編年史料Ⅱ』を刊行しました。

そして、今回の『豊島氏編年史料Ⅲ』では、徳川幕府に仕えた旗本豊島氏に関する史料を中心に掲載しています。江戸時代初期に代官として活躍した豊島忠次や勝直のほか、江戸城内で刃傷事件や江島・生島事件に関わり、連座した豊島氏一族に関する史料も掲載しています。また、豊島氏の関係する寺社縁起についてもなるべく掲載しました。このほか、『編年史料Ⅰ・Ⅱ』で収録できなかった美濃富島氏の関連史料など中世の豊島氏関連史料も、「補遺」として収録してあります。口絵・図版・解説および付録を含めると二〇〇頁の充実したものとなりました。皆さんもぜひ一度手にとってパラパラとめくってみてください。

『中世豊島氏関係資料集』は本書の刊行で完結することになりましたが、郷土資料館では、今後も引き続き豊島区にかかわる中世史研究を事業のなかに位置づけ、継続していきたいと考えています。

【豊島区立郷土資料館編、豊島区教育委員会発行、二〇〇三年三月、B5判、二〇〇頁、頒価一四〇〇円、*本書は、郷土資料館窓口および行政情報コーナーにてお買い求めになれます。】
(伊藤)

第一回企画展まもなく開催！ 絆纏 — 藍染めの仕事着 —

六月七日(土) ～ 七月二七日(日)

◆「祭のときに着ている、あれ？」

…いいえ、実は、神輿の担ぎ手が着る揃いの絆纏ではありません。今回は、職人や商店のユニフォームとして現在でも好まれている印絆纏、また、かつて地域に消防組があつた時代に着ていた火消絆纏等、約五〇点を展示します。いずれも明治期から戦前までに作られ、区内で使用されてきたものです。つまり、祭絆纏のように鮮やかな色彩のものではなく、藍色に染めた木綿で仕立てられた、どちらかといえば、一見地味な感じがするものといえるものかも知れません。でも…

◆「これって字なの？」

通常印絆纏と呼んでいるものは、色や形、大きさに、それほどの違いはありません。しかし、細部を見ると、あります、個性があるのです。衿や背中を見てください。また、裾の方も見て下さい。強烈な印象を受けることでしょう。では、写真1を例に、意匠的な面白さを見てみましょう。これは、印絆纏の背面です。まず目にとまるのは、丸のなかにある「野」の字です。この文字は江戸文

字で、使用者の野崎姓からきています。

くつきりしていて、遠くからでも目立ちます。これを大紋といいます。次に、先の文字ほど目立ちはしませんが、裾回りにある幾何学模様らしきものが気になります。これは、染屋さんの間で「角くずし文字」と呼ばれている字体のもので、石材店ですから、石材を角くずし文字で表しています。これを腰字といいます。

正面の写真は載せてありませんが、衿には「小松屋石材店」と染め抜かれています。それは、この印絆纏を着る店(野崎姓)が、その分店だったという理由



写真1 巢鴨駅前にあった野崎石材店の印絆纏

からのようです。着丈八四cm、裾一二六cmのこの絆纏は、店内で着用していたので店絆纏とも呼びます。右袖の袖口を折り返してありますが、ここの袖口布の色は茶色です。印絆纏の袖口布に使用されている布は木綿、そして、色は浅葱色や茶色が多く使われていたということで、つまりこのような色使いは、印絆纏の共通点でもあるようです。

◆「そんなに重くなるの？」

印絆纏は単衣のものが多く、一着が五〇〇グラム程度ですが、火消の刺子絆纏は、一着が二〇〇〇グラム前後もあります。これを着た上から水を被り、そして火の中へということになると、実際には二倍から三倍の重さになったといえます。また、かつて、区域内に消防組(一軒のうち一人は組に加入することが決まりのようだった)が存在していた頃、家の玄関先など出入口近くにこれを掛けておき、区域内の火事場へすぐ出動できるように心がけてもいたということです。

写真2のものは、昭和初期に長崎地区の方が着用していたもので、形は「被布仕立て」です。使われている布は木綿で藍染め、二、三枚の布を重ね合わせ、綿の糸で刺したものです。裾の四本線は白色の染め抜きで、衿下に見える三文字は、

実は「五番階子」という四文字で、「階子」の二文字を一文字にして見せているため三文字に見えています。さらに「階子」は、大紋として背にあります。

◆「着てみたいなあ」

暮らしの中で、絆纏がどのようにして作られ、使われてきたのか。そして、それを着ることに、どのような意味があつたのか。意匠的な部分の楽しさとともに、ひとつひとつの絆纏が伝える歴史に気をとめて、ご覧いただきたいと思います。なお、今回は、資料の絆纏に袖とおし、実際に着てみる機会を作りました。興味を持たれた方は、展示説明会へお越しください。ご来館お待ちしております。

*六月一四・二八、七月一二・二六日。いずれも土曜日、午後三～四時。事前申込みは必要ありませんので、直接展示室へお越しください。

(福岡)



写真2 長崎町消防組四番組「五番階子」の刺子絆纏

収蔵資料展「豊島の空襲―戦時下の区民生活―」を終えて

二〇〇二年度第三回収蔵資料展「豊島の空襲―戦時下の区民生活―」は、会期を延長して、五月二日まで開催し、無事終了いたしました。この間、多数の皆様にご来館いただきました。どうもありがとうございました。次に、展示をご覧になった方のアンケートから、いくつかをご紹介します。

◇4月13日に空襲にあいました。当時池袋四丁目に住んでいました。近くに爆弾が落ちて、子供が「お母ちゃん助けて」といった声が今でも耳のなかにあります。…当時のことをよく思い出しました。

(77歳・女性)

◇ハガキや手紙がとても興味を持てた。

当時のその人たちの状況がとても生き生きと伝わってきた。(42歳・男性)

◇戦争、集団疎開、空襲のすさまじさを思い出して、ここに展示されてないあれこれを思い出すきっかけになった。単に懐古するにとどまらず、「繰り返しはならぬ事」を伝える責任が我々体験者にはある。(67歳・男性)

◇戦争をするということは、一般の人々

の死が、決して避けられないものだということ、数々の資料を見てあらためて実感した。イラクをめぐる情勢とリンクさせてみても、考えること多い展示であった。(23歳・男性)

◇非常に興味深く拝見いたしました。私共世代には知らない事が多く、目で見てわかる記録は、大変理解しやすくてよいと思いました。(32歳・女性)



会期中の展示室のようす

◆四月一三日の豊島区空襲（続き）◆

一九四五年四月一三日空襲（豊島区が受けた最大のもの）について、日・米の記録には大きな差異があります。

米軍爆撃機B29の機数は、日本側の「警視庁消防部空襲災害状況」（「東京大空襲・戦災誌」第三巻所収）では約一六〇機であるのに対し、米軍の「作戦任務報告書」（奥住・早乙女「東京を爆撃せよ―作戦任務報告書は語る」より）には三五二機となっています。これはもとより、アメリカ側が正しいのですが、これほどの「数え誤り」がどうして生じたのかでしょうか。前号で述べたように、投弾開始と同時に、一面火の海という状況では、正確さは期しがたいでしょうが、やはり、できるだけ小規模であって欲しいという心理的な、あるいは政治的なものがあつたのかもしれない。

投下弾の種類と数についても大きく違ってきます。まとめて比較すると、下表のようになります（出典は機数と同じ）。日米で爆弾・焼夷弾の種類分けが違いますので、同じものを指すと考えられるものを横の段に並べて表しました。

M47A2（四五kg油脂焼夷弾）がほぼ見合っていることを除くと、やはり大きな差があります。米側資料のうち、「モ

ロトフのパン籠

とか「親子爆弾」

とかいわれた集束

焼夷弾E46を、子

爆弾であるM69

（ナバーム焼夷弾。

日本側の二・八kg

夷弾にあたる。E

46一発あたり四八

発含まれている。）

で計算すると、四

三万五九六にな

り、日本側の記録

をはるかに上回っ

てしまいます。

また、米側にな

い一七kgエレクト

ロン焼夷弾（マグ

ネシウムとアルミ

ニウムの合金を燃

焼素材とした焼夷

弾）を二・八kg焼

夷弾に重量で換算して計算しても、二・

八kg焼夷弾は合計一七万三三三八個にし

かなりせん。小型焼夷弾については、種

別・数量とも日本側が把握できなかった

ことが分かります。

（あおき）

アメリカ側記録

M64五〇〇ポンドG.P.爆弾	319
M59一〇〇〇ポンドS.A.P.特殊目的弾	4
M47A2一〇〇ポンドI.B.油脂焼夷弾	6447
E46五〇〇ポンドI.C.集束焼夷弾	9077

日本側記録

二五〇キロ爆弾	75
一五〇キロ爆弾	130
四五キロ級大型油脂焼夷弾	6473
二・八キロ小型油脂焼夷弾	約65238
一七キロエレクトロン焼夷弾	約18050

豊島をさぐるその8

からたちの花 — 山田耕作・自営館の思い出 —

からたちの花

北原白秋 作詞

山田耕作 作曲

からたちの花が咲いたよ

白い白い 花が咲いたよ

からたちのとげはいたいよ

青い青い 針のとげだよ

からたちは畑の垣根よ

いつもいつも とおる道だよ

からたちも秋はみのるよ

まろいまろい 金のたまだよ

からたちのそばで泣いたよ

みんなみんな やさしかったよ

からたちの花が咲いたよ

白い白い 花がさいたよ

学生に仕事を与え、自活させながら学校へ通わせるための施設でした。耕作少年は、幼いながら一三才まで、館内の活版工場で働いていました。当時の思い出を山田耕作は『自伝 若き日の狂詩曲』のなかで次のように語っています。

特に私など、育つ盛りだったので、すりへらした庭下駄のような薄い寄宿舎の弁当では、とても足りようはずはなかった。たまらなくなると、活版所の周囲の畑から、季節季節の野菜を手当り次第にとっては、生のまま齧った。胡瓜、大根などは御馳走だった。茄子も二つに割って塩でこすれば充分舌に乗った。どうしても駄目なのは南瓜だ。秋になると私の眼は輝いた。枳殻の実が色づくからだ。はじめはすっぱくて咽せかえるほどだったが、馴れると仲々よきものだった。殊に生の野菜と一緒に食べると、下手なサラダなどより数等いい味だった。工場で職工に足蹴にされたりすると——活版職工は大体両手がふさがっている、るので、殴るよりも蹴る方が早かった

私は枳殻の垣まで逃げ出し、人に見せたくない涙をその根方に灌いだ。そのまま逃亡してしまおうと思った事も度々ではあったが、蹴られて受けた傷の痛みが薄らぐと共に、興奮も静まった。涙もおさまった。そうした時、畑の小母さんが示してくれる好意は、嬉しくはあったが反ってつらくも感じられた。漸くかわいた頬がまたしても涙に濡れるからだ。

枳殻の、白い花、青い棘、そしてあのまろい金の実、それは自営館生活における私のノスタルジアだ。そのノスタルジアが白秋によって詩化され、あの歌となったのだ。

耕作少年は、ブランコの曲芸で腕を脱臼したり、庭園の池に飛び込んで鯉や鮒を捕らえて食べたり、五位鷺捕獲に失敗して警察に突き出されそうになったりと、なかなかの腕白ぶり。年上の塾生たちに励まされて作曲家への夢を膨らませた時でもありました。

そもそも自営館は、明治二十一年、牧師であった田村直臣によって芝白金に設立され、明治二十七年に巣鴨宮下へ移転した施設でした。学生は帝大、早大などへ通いながら、畑仕事、牛乳配達、とうもろこし飴作り、西洋洗濯、活版所の仕事に

従事しました。多くの穎才が巣立ちましたが、利益が上がらず、田村塾と改称して学業に専念させる施設にもなりましたが、ついには経営難から大正八年（一九一九）に廃止されます。跡地は大正幼稚園（現巣鴨幼稚園）になりました。



平成十一年（一九九九）、森下憲郷牧師らによって、現在の巣鴨教会の敷地内に、「からたちの花」の記念碑が建てられました。記念碑のまわりを取り囲むように植えられている「からたち」は、北原白秋記念館（福岡県柳川市）から種を分けてもらって育てたものだそうです。白秋少年の通学路にもからたちの垣根があったということです。（薬師寺）

セピア色の記憶

第5回 鬼子母神大門ケヤキ並木の行方

ここに示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和一五（一九四〇）

年頃と現在（平成一五年五月一三日）の
↓は撮影方向を示しています。

都電荒川線の「鬼子母神前」停留場を下車し鬼子母神堂に向かうと、まもなくこのケヤキ並木の参道となります。急激な都市化により昔の面影が消えてしまった豊島区内で、江戸時代の景観・雰囲気

東京府では、昭和一五年四月一八日に

「鬼子母神大門櫟並木」として天然記念物に指定しています（現在の正式名称は

「東京都指定天然記念物鬼子母神大門ケヤキ並木」です）。寛文六（一六六六）年

に本殿が建立された鬼子母神堂が都の指定を受けるのが昭和三五年、また同境内

の子育てイチョウが都の指定を受けるのが昭和三一年のことですから、早い時期

からこの並木の存在を重要視していたことがわかります。

さて、雑司が谷の住人であった金子直徳（一七五〇〜一八二四）が記した地誌

『若葉抄』では、この並木は地元の長島

内匠が奉納したものであるとし、江戸市中には境内の広い寺社はあるけれども、

並木が奉納された事例はなく、長島の行為を素晴らしいことであると評価してい

ます。また、文政年間（一八一八〜二九）に雑司が谷町から幕府へ提出された『地誌

御調書上』には、この並木は長島内匠が天正年間（一五七三〜九一）に奉納した

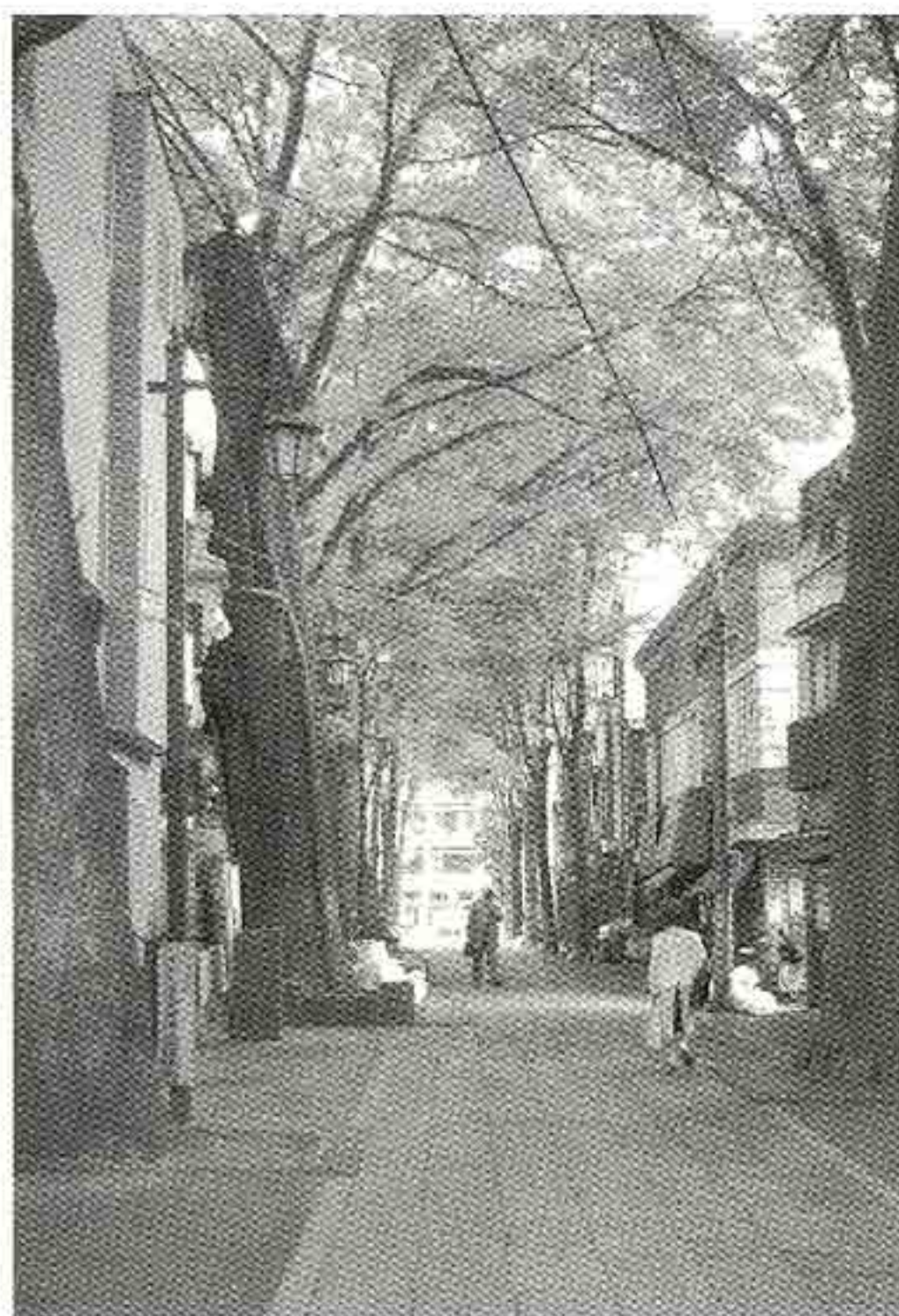
ものとしています。ただし、長島が奉納したとされる、昔ながらの迫力あるケヤ

キの「巨木」は、今や四本となっていました（下写真に見えるやや細めのケ

ヤキは、「巨木」が枯死した折に豊島区で補植したもの。なお、東京都教育委員会による『東京都の文化財（三）』（一九九二年）では、目通り幹囲五〜六メートル、樹齢約六〇〇年としています。

ケヤキ並木が徐々に枯れていった原因として、①全国的な傾向としての大気汚染の進行、②参道を通る車の「根踏み」の影響、③参道を舗装したことによる雨水浸透率の低下、④枝切りによる幹部分の衰弱などが考えられています。

全世界的に自然環境に関する議論がなされる中、上写真のような鬱蒼としたケヤキ並木の状態に戻すことは難しいかも知れませんが、関係各方面と知恵を出し合い、この貴重な緑のオアシスを後世に伝え残していきたいものです。（秋山）



郷土資料館からのお知らせ

郷土資料館年間事業予定

展 示

◇第1回企画展 6月7日～7月27日

「絆纏―藍染めの仕事着」

◇第1回収蔵資料展 8月6日～9月28日

「続・戦争と豊島区」(仮称)

◇第2回企画展 10月8日～11月30日

「伊藤伊兵衛とその時代」(仮称)

◇第2回収蔵資料展 12月10日～3月31日

「豊島の歴史と文化」(仮称)

*会期中展示説明会を予定しています。

講 座

◇地域史講座(10回) 5月～2月

「わかる豊島区」(募集済・開催中)

◇都電・地下鉄車庫見学会(2回) 8月

◇歴史講座(5回) 11月～12月

「『豊島氏編年史料Ⅲ』を読む」

刊行物

◇館だより「かたりべ」70号～73号

◇新着図書情報 25号～36号 月1回

◇研究紀要「付・02年度年報」第13号

8月発刊予定 価格未定

◇調査報告書第16集 3月発刊予定

『豊島の集団学童疎開資料集(8)』 価格未定

調 査

◇調査報告書刊行に向けての調査

集団学童疎開関連調査 長野県山田温泉

◇企画展・収蔵資料展開催のための調査

整 理

◇旧田島家長屋門収蔵資料の整理作業

◇区内諸家寄贈資料のの整理作業

臨時休館

◇資料燻蒸、展示替えのための全館休館

5月22日(木)～6月6日(金)

◇展示替えに伴う全館休館

①7月28日(月)～8月5日(火)

②9月29日(月)～10月7日(火)

③12月1日(月)～12月9日(火)

*都合により、事業内容や開催時期に変更が生じる場合があります。各事業の詳細につきましては、『広報としま』紙上でご案内いたします。

編集後記

「かたりべ」70号をお届けいたします。冒頭で紹介した『豊島氏編年史料Ⅲ』は、中世豊島氏研究会のメンバーが分担し、それぞれが仕事の合間をぬって翻刻・執筆を行ったものです。執筆者の蔵持・小林・則竹・櫻井・今野各氏には心より御礼申し上げます。

現在、郷土資料館では、まもなく開催される企画展「絆纏―藍染めの仕事着」準備のため、職員総出で大忙しの毎日です。区民の方々から寄贈を受けたたくさんの方々が勢揃いします。藍染めの仕事着から何がわかるのか、「謎解き」に満ち溢れた企画展にご期待ください。(あき)

かたりべ

No.70

2003年6月1日

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351